色づくわたしたち

みちすすき

【登場人物】

牧野　早苗（21）……教育実習生

藤本　千景（17）……高校生

千景の母（45）

早苗の義父

田辺（56）……女性教員

橋本（48）……男性教員

生徒たち

早苗の母

教育実習生たち

○高校（女子校）（夕）

放課後、部活や文化祭の準備をする生徒たち。

○同・礼拝堂内（夕）

無人の礼拝堂。ぼさぼさ頭にすっぴん顔の牧野早苗(21)が床を見回し何か探している。やがてペンを見つけて拾い上げ、目線の先に黒い容器を見つける。拾ってそっとフタを開けると、中には真っ赤な口紅。手が震え、気持ち悪そうに口元を手で押さえる早苗。と、礼拝堂の正面の扉が閉まる音。早苗が振り返ると、そこには襟まで白いセーラー服を着た、人形のように美しい藤本千景(17)が立っていた。目が合う二人。

早苗は千景に背を向け、脇の扉から去っていく。

○同・職員室（朝）

翌日。『教育実習生　牧野』と書いた名札を付け、ほかの実習生と並んで年配女性教員の田辺の話を聞く早苗。

田　辺「今日も頑張りましょう」

ほかの実習生が散っていく中、早苗は田辺に近づく。

田　辺「（気がついて）どうしたの？」

早　苗「（口紅を握り）えっと、あの……」

早苗、田辺の赤い口紅に怯み、言葉が出ない。

田　辺「（書類をまとめながらイラついて）……今、時間ないの。後でいい？」

○同・廊下（朝）

とぼとぼと歩く早苗。

千景の声「あの、牧野、先生？」

早苗が振り返ると、後ろに千景が立っている。

千　景「先生、昨日、礼拝堂で拾いましたよね」

早　苗「……？」

千　景「（声を落として）口紅。赤い口紅」

早　苗「え……（千景の顔を見て）あ」

千　景「あれ、私のなんです。返してもらえませんか？」

早　苗「はあ……あ、でもああいうのは禁止されて……」

千　景「……たまたまカバンに入っちゃっただけなんです。学校で使うつもりもないし、いいじゃないですか」

早　苗「でも、ちゃんと先生に……」

不機嫌に早苗を睨む千景。そこにやってくる田辺。

田　辺「お待たせ、藤本さん」

千　景「（パッと笑顔で振り返り）あ、はい」

と、にこやかに田辺と話しながら去っていく。

早苗、息をつき、ポケットの口紅を覗く。

○同・教室前

プリントなど授業道具を両手に抱えて立つ早苗。

そこへ中年の男性教員の橋本が近づき

橋　本「大丈夫？　何か持とう――」

橋本の手が、早苗に向かって伸びてくる。その手を早苗は思わずはたく。驚き固まる橋本。

早　苗「（はっと気がつき）あ、すみませ……すみません」

教室に入っていく千景、横目にそれを見ている。

○同・教室

千景のクラスで英語の授業を行う早苗。生徒たちの多くは話を聞いていないが、千景は早苗を見ている。

早　苗「（ぼそぼそと）えっと、この問題、解いてくれる人？」

誰も手を挙げず、静まりかえる教室。後ろで見ていた橋本がため息をつく。

千　景「（手をスッと挙げ）はい」

早　苗「え、あ、（座席表を見て）じゃあ……藤本さん」
千景、黒板の英文に赤いチョークで修正を入れていく。早苗は自分のプリントと黒板を見比べて
早　苗「あの、さっき説明したんですけど、そうじゃなく――」
千　景「え？　（笑顔でわざとらしく）ああ、すいません。声が小さくて聞こえづらかったもので」
笑いを堪える生徒たち。赤くなる早苗。
千　景「（早苗のプリントを覗きこみ）どうでしたっけ？」
と、持っていた赤チョークが早苗の手に当たる。
千　景「あ、すいませ――」
早苗、手に付いた赤色を慌ててこすり落とす。
それを不思議そうに見る千景。

○同・女子トイレ・手洗い場

ポーチから化粧道具を出し、化粧直しをする生徒A・B。千景はそれを見ている。
千　景「（笑って）それは……」
生徒A「（アイラインを引き）いける、ばれない」
生徒B「てか千景、さっきの何？　うけたんだけど」
千　景「（リップクリームを塗り）別に。率直な意見」
生徒B「（笑って）ひど。てかあの人さあ……」
生徒A「寝起きの小学生だよね」
生徒B「（噴き出し）小学生に謝りなよ。でもまじ、メイクくらいしとけって感じだよね」
千景は笑いもせず、黙って話を聞いている。

○ドラッグストア（夜）

学校帰りに、化粧品のコーナーを眺める千景。

○千景の自宅・リビングダイニング（夜）

一軒家のリビングダイニング。

千景の声「ただいま」
声とともに入ってくる千景。台所には母親がいる。部屋中至るところに、白百合が飾られている。
千景の母「おかえり。ごはん、もうすぐ……」
と、千景の持つドラッグストアの袋に目をとめ、近づいてくる。千景は中身を取り出し、見せる。
千　景「リップクリーム。無色透明、無臭のやつ」
母親は空の袋を受け取り、中を執拗に確認する。
千　景「ごはんになったら呼んでね（部屋を出ていく）」

○同・千景の部屋（夜）

千景、カバンの中から新品の口紅を取り出す。
鍵付きの引き出しから鍵付きの箱を出す。化粧品でいっぱいの箱の中に新しい口紅を加え、満足げな顔。

○同・リビングダイニング（夜）

私服に着替えた千景が母親と夕飯の片付けをしていると、テレビに化粧をした女子高生が映る。
千景の母「高校生がこんなに派手な顔して……ちーちゃんとは大違い。ね？」
千　景「（母親と目を合わせず）うん……」
千景、自分を囲む大量の白百合から目を逸らす。

○高校・階段

千景の声「牧野先生」
大きな窓のある踊り場で、千景が早苗を呼び止める。
千　景「あの、あれ、もう先生に渡しちゃいました？」
早　苗「……あれって？」
千　景「口紅ですよ」
早　苗「（ポケットの上から口紅を握り）……まだ、だけど」

千　景「（早苗の手を見てにやっと笑い）よかった。実は私、ちゃんと自分で先生に言おうと思って。だからあの口紅、渡してほしいんです」

早苗が返答に詰まっていると、チャイムが鳴る。

千　景「今日の放課後、礼拝堂に来てくれませんか？　そこで受け取るので」

○同・礼拝堂（夕）

放課後。無人の礼拝堂で千景を待つ早苗。窓ガラスの前に立つと、不格好な自分の姿が映る。

手に持った口紅を見つめ、フタを開けてみる。が、赤い口紅に吐き気を感じてすぐに閉じる。

千景の声「何してるんですか、先生」

早苗が振り向くと、そばに千景が立っている。

千　景「お待たせしました、はい（早苗に手を伸ばす）」

早　苗「……本当に、自分から先生に言ってくれるんだよね？」

千　景「（にっこり笑って）はい」

早苗、千景に口紅を渡す。

千景はフタを開け、嬉しそうに口紅を見る。そこから目を逸らす早苗。

千　景「（ふふっと笑い）……口紅、嫌いですか？」

早苗が黙っていると、千景が自分の唇に口紅を塗り始める。早苗、驚いて後ずさりしようとするが、すぐ壁に当たって動けなくなる。

にやりと笑う千景。早苗に詰め寄り、その手を取る。

千　景「どうしてそんなに嫌がるんですか？」

千景、髪をかき上げ、早苗の手の甲にキスをする。

千　景「ほら、こんなにきれいなのに（手の甲の口紅を見せる）」

恐怖で固まる早苗に、千景は楽しそうに笑う。

千　景「そうだ、先生も塗ります？　もしかして先生、塗ったことなかったりして」

と、口紅のフタを開け、早苗の唇に近づける。

口紅を凝視し、震える早苗。

×　　×　　×

早苗の回想。

鏡台の鏡に映る、口紅を塗られた小学生の早苗。

泣きそうな早苗の足を、男の腕が撫でまわす。

×　　×　　×

早苗、千景を振り切りふらふらと逃げ出す。おぼつかないその足元を、千景はにやにや眺めている。

と、早苗が足を止め、膝をつく。そのまま嘔吐する。

千景、驚いて呆然と早苗を見つめる。

○同・廊下（朝）

翌日。一人で立っている早苗の近くをしばらくうろついていた千景、話しかける。

千　景「あの、おはよう、ございます……」

早　苗「（目を合わせずに）……おはようございます」

千景、もじもじとして何も言えない。

早　苗「……心配しなくていいから」

千　景「え？」

早　苗「口紅のこと、先生に言わないから……もう構わないで」

去っていく早苗に取り残される千景。

○同・教室（夕）

放課後。生徒たちが文化祭の準備をしている。

ノートの積まれた教卓の隣にぼうっと座る千景。

生徒Ａ「（千景に衣装を見せ）これどう？　よくない？」

千　景「ん？　あー、うん……」

千景、ぼんやりと赤いチョークを見つめる。

○同・英語教員室（夕）

ノートの束を抱えて入ってくる千景。部屋には早苗しかおらず、一瞬合った目を早苗はすぐに逸らす。

早　苗「……ノート、そこの机だそうです」
すでにノートが積まれた机に、千景はノートを置く。
早苗は別の机に向かい、作業をしている。
千　景「（早苗のそばに立ち）……何してるんですか？」
早　苗「（顔を上げずに）交流会の準備。先生に頼まれて」
と、歌の譜面に折り紙の飾りを糊付けしていく。
見ていた千景、飾りに糊を塗って早苗に渡す。
一瞬躊躇うが、それを受け取って貼りつける早苗。
沈黙の中、二人の作業が続いていく。
千　景「（少し震えた声で）あの、昨日のこと、なんですけど」
手を止める早苗。
千　景「すいませんでした。私、その、ああなると思ってなく……
いや、ひどいことして、本当に、ごめんなさい」
早　苗「（顔を上げて）……私も、変なところ見せて、ごめんね」
二人、作業を続けながら話す。
千　景「牧野先生は……口紅、嫌いなんですか？」
早　苗「嫌いというか……苦手、なの」
千　景「……なんでですか？」
黙りこむ早苗。千景もそれ以上聞かず、余っていた折り紙で花を折り始める。
早　苗「……藤本さんって、いい匂いするね」
千　景「え？　ああ……家に帰る前に拭きとるんですけどね。（笑って）ちょっとでも香りが残ってたら、大変」
思わず千景を見つめる早苗。
千　景「……なんでって聞かないんですか？」
と、折った花を早苗に渡す。
早苗が口を開く前に、橋本がやってくる。
橋　本「ごめんねー牧野さん……（千景を見て）ってあれ？」
千　景「あ……じゃあ、私、これで」
と、出ていく。早苗はその後ろ姿を見つめる。

○早苗の夢

一人で遊んでいる小学生の早苗。母親が現れる。

早苗の母「早苗、新しいお父さんだよ」
母親の横から、義父が現れる。目より上は見えない。
早苗の義父「よろしくね、早苗ちゃん（早苗の頭をなでる）」
×　×　×
鏡台の前に立つ義父。それを見る小学生の早苗。
早苗の義父「（早苗に気がつき）おいで」
義父は早苗を鏡の前に座らせ、その唇に口紅を塗る。
早苗の義父「ほら、かわいいね、早苗ちゃん。これからもっと、もっとかわいく、綺麗に、ああ、早苗ちゃん……」
と、手を早苗の太腿に這わせる。触れられた箇所に、赤い口紅の跡が付いていく。
×　×　×
はっと目を覚ます早苗。電車の中で座って寝ていた。隣に座る男性も寝ており、その片手が早苗の足に触れそうである。早苗、席を離れドア横に立つ。
千景にもらった折り紙を取り出し、見つめる。

○千景の自宅・玄関（夜）
帰宅した千景、廊下に割れたチークが落ちているのを見つける。

○同・千景の部屋前（夜）
階段を駆け上がってくる千景。
開いたドアから見える自室は物が散乱し、ごみ箱も倒れぐちゃぐちゃ。

○同・リビングダイニング（夜）
千景、入ってくる。テーブルに鍵の壊れた千景の化粧品箱。母親がハサミを持って立っている。
千景の母「おかえり」

パチン、と白百合の首を切る母親。床には切られた白百合の花がいくつも重なっている。

○高校・廊下

翌日。友達と話しながら歩く千景。その顔は暗い。

生徒B「あのリップいいよー。親と一緒に使ってる」

千景、突然ふらつき、口元を押さえてうずくまる。

生徒A「えっ千景？」

通りかかった早苗、千景の様子に気づき駆け寄る。

○同・保健室

ベッドに横になる千景。保健の先生はおらず、早苗がその傍らに座っている。

早　苗「（布団を整えながら）貧血かな……ちょっと寝て――」

千　景「（口紅を取り出し）もう、これだけになっちゃった……」

早　苗「え？」

千　景「今まで、頑張って……集めてきたのに」

千景の目に、じわっと涙が浮かぶ。

×　　×　　×

千景の回想。

白百合の花が散乱した自宅のリビング。母親が千景の化粧品箱を抱えて中身を床に叩きつけ、踏みにじる。

白百合がつぶれ、化粧品の色で汚れていく。

千景の母「淫乱、裏切り者、恥知らず！」

と、化粧品を千景にも投げつける。白い制服が汚れていく。千景は抵抗もせず、無表情に立っている。

×　　×　　×

千　景「昔から何度もあったんです、こういうの……」

早　苗「何度も……」

千　景「母の前ではそういうものを隠し通す。それが、あの家で生きるための手段なんです。（笑って）引きますよね」

早苗、千景を見つめ、その手に自分の手を重ねる。

早　苗「引かないよ。わかるから、私も」

千景、早苗を見つめる。

早　苗「……私の場合はね、父だった。義理の父親」

×　　×　　×

早苗の回想がいくつか重なっていく。

鏡に映る、口紅を塗られて目を見張る小学生の早苗。

隣で義父の口元が笑っている。

朝、よれた服にボサボサ頭で登校する小学生の早苗。

早苗の声「必死にね、ブスでいようって思ったの」

両親と出かける中学生の早苗。義父がこっそり早苗の肩を抱き寄せ、腰まで触る。早苗、触られた箇所に口紅が付いたように見え、こすり落とそうとする。

野暮ったい恰好で鏡の前に立つ高校生の早苗。自室の白い制服に口紅のキスマークがいくつも付いているのに気づく。風呂場で制服を必死に手洗いし、顔を覗かせた母親に引きつった笑顔を見せる。

早苗の声「かわいくなんて、綺麗になんて、ならない。絶対」

引越しトラックの横で両親に挨拶する大学生の早苗。

母親が離れた隙に義父が早苗のカバンに何か入れる。

早苗がそれを確認する前に、母親が戻ってくる。

新幹線の中で小さな袋を見つけた早苗。開けると、中には黒い容器の口紅。一瞬、隣の席に義父が座ってその目が自分に向けられた幻覚が見える。たまらず口を押さえ立ち上がる早苗。

×　　×　　×

暗い顔の早苗。千景の目からは涙が流れている。

早　苗「ごめんね、こんな話、聞かせて……」

早苗の手をぎゅっと握り、首を振る千景。

○同・廊下（別日）

放課後。文化祭の準備をする多くの生徒たち。

塗装作業をする千景。生徒の一人が絵具のパレットをひっくり返し、千景の制服が様々な色で汚れる。

笑った千景がポケットからティッシュを取り出すと、
口紅も一緒に出て落ちる。
転がる口紅、それを拾う田辺。
×　　×　　×
汚れた格好のまま大声で田辺に叱られる千景。生徒たちが横目に見ている。そこを通りかかる早苗。

田　辺「藤本さんは、良い子だって信じてたのに……これは、先生のほうで処分します」

千　景「えっ……」

早　苗「あの、先生」

田辺、早苗に気づく。

早　苗「その口紅、私のなんです。たまたま藤本さんが拾ってくれたみたいで……ね、藤本さん」

驚いて早苗を見つめる千景。

田　辺「そうなの、藤本さん？」

千　景「……（俯く）」

早　苗「誰のかわからないし、困ってたんじゃないでしょうか」

田　辺「……それならそうと言ってよ、私が困っちゃう、ねえ」

千　景「……すいません」

田　辺「（口紅を渡しながら早苗を見て）それに牧野さんも……そういうの持ってるなら、もう少しマシな恰好したらどうなの？　余計恥ずかしいじゃない」

早苗、顔を赤らめて俯く。千景、田辺を睨み

千　景「うるさい、おばさん。鏡見てから言えば？」

驚き固まる田辺と周囲。辺りが静まりかえる。
千景自身も、しまったと呆然としている。
その手を強くつかむ早苗。千景、ハッと我に返り、早苗を見る。早苗は頷き、千景の手を引く。
走って逃げだす二人。

生徒Ａの声「千景？」

廊下の先に、走る千景と早苗を不思議そうに見る生徒Ａ・Ｂが。千景、足を止めると生徒Ａが持っていたポーチを指し

千　景「ごめん、それ貸してくれない？」

生徒A「え？　いい、けど……？　（ポーチを渡す）」
千　景「ごめん、後でちゃんと話すから」
と、再び早苗と走っていく。
ぽかんとする生徒A・B。

○同・礼拝堂

祭壇上。壁に取り付けられた鏡の扉が開いている。その前に座り、落ち着かない表情の早苗。
千景はポーチに入っていた化粧道具を並べ
千　景「先生、目つぶって。嫌だったら言って、やめるから」
早苗、千景と目を合わせ、頷くと目をつむる。
千景はその顔にメイクを施していく。
千　景「（アイメイクをしながら）嫌じゃない？」
早　苗「大丈夫……人にやってもらうのって、気持ちいいんだね」
最後にチークを入れてメイクが終わる。
千景、さらに早苗の髪を櫛でとかす。
千　景「よし、できた……ほら、先生、かわいいよ」
目を開く早苗。綺麗になった自分の姿に目を見張る。
千　景「どうかな……大丈夫？　気分、悪くない？」
早　苗「（くすっと笑い）うん、大丈夫。こんなに……」
と、何もついていない唇に気がつき、触る。
早　苗「ここ……」
千　景「そこは、だって……いいの？」
じっと千景を見つめ、目を閉じる早苗。その唇に千景は口紅を軽く乗せ、馴染ませる。
目を開ける早苗。鏡を見て表情が明るく輝く。次第に涙が浮かび、肩が震える。
千景、たまらず早苗に抱き着く。
千　景「かわいくなって、綺麗になっていいんだよ。先生に変なことする奴がいたら、私が守ってあげる、だから」
早　苗「うん……ありがとう（千景を抱きしめ返す）」
窓から差す柔らかな日が二人に降り注ぐ。

○同・廊下（夕・別日）

実習生「お世話になりました」
と、職員室に頭を下げ、荷物を持って出ていく教育実習生たち。早苗は一人で歩いている。

千景の声「牧野先生！」
振り返ると、千景が階段を駆け下りて来ている。

千　景「先生、これ。（小さな袋を渡し）開けて」
早苗が開けると、色鮮やかな容器の口紅が出てくる。

千　景「先生に合いそうな色、選んでみました。無理に塗らなくていいんです……いつか大丈夫になったら」

早　苗「ありがとう……！　大事にするね」

千　景「えへへ……もうこれで、会うのは最後、ですかね」
体をもじもじさせ、俯く千景。

早　苗「文化祭、もうすぐだね」
千景、顔を上げる。

早　苗「そのときにまた来るから、今度はもっときれいな恰好して。だから、その、（千景の手を取り）アドバイス、してくれる？」

千　景「（微笑んで）……はい。約束ですよ」
微笑み返し、千景と指を絡めて手をつなぐ早苗。

終